

ユースの視点で見た生物多様性の評価に関する ステイクホルダーのあり方

崎山メリーナ

キーワード：生物多様性の評価、ユース

1. 研究の背景と目的

生物多様性に関する合意形成を進める上では、生物多様性の評価方法をさらに開発するだけでなく、生物多様性を支える様々な構成要素や機能についての理解の重要性、そして、それらが社会にどのように評価されているかを社会に気づかせる必要がある。しかしながら、自然の生産物の複雑性により、ほとんどの評価には多くの限界があり、提供されるすべてのサービスについて信頼性をもって評価することはできない (Turner et al., 2003)。

本論文の目的は、積極的に生物多様性に関連する問題に従事する若者の視点での解析を通じて、生物多様性の評価のプロセスについての議論を進展することである。議論では、評価プロセスから生じる可能性のある生物多様性の商品化のリスクに対する経済に対し、保全目標を統合していくために、生物多様性への経済的価値の必要性について言及している。

2. 研究の方法

研究対象は、世界の18～35歳のユース（学生や専門家）であり、生物多様性に関連する問題に積極的に関わる者である。このようなグループを対象に、オンラインプラットフォーム (Google Spreadsheet) を介してウェブ上にアップロードし、アンケート調査を行った。また、京都大学地球環境学堂およびサンパウロ大学の学生にアンケート調査紙に記述するよう依頼した。調査は2012年9月から12月にかけて行い、64名からの回答を得た。質問紙は大きく2つの部分から構成され、1つめは、回答者の属性、背景となること、興味、活動である。2つめは、生物多様性の市場価値に関するもので、回答者が関連する議論の中での鍵となる事項についての考え方を示すものである。ユースの視点や考えを分析するために、リッカート型尺度を活用した。

3. 研究の結果と考察

ほとんどの回答者が保全活動を進めるためのツールとして、生物多様性の経済的評価を行うことに賛成しているが、生物多様性の利用と結びつかない価値、非人間中心主義的な価値を考慮しない今日の慣習について懸念を示していた。回答者は、生物多様性そのもの、特にその価値、重要性、地球上での役割についての認識の欠如を取り上げ、経済的な価値には結びつかない価値があることを強調していた。

生物多様性、社会、文化の相互依存についても、とりわけ大事な事項として取り上げる多くの回答あった。ほとんどの回答者にとって、文化と社会は本質的に生物多様性と結びついた相互依存のものであり、合意形成においてこれらは同次元かつ不可分のもとして扱う必要があるととらえられていた。生物多様性の価値に対する意識を深めることも緊急の課題としてあげられた。